

Title	米洲行日誌(5)
Author(s)	山本, 一清
Citation	天界 = The heavens (1937), 17(198): 449-455
Issue Date	1937-09-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/167544
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

米 洲 行 日 誌 (5)

山 本 一 清

5月10日(月曜日)

船は朝早くカヤオ港外に到着。甲板上から眺めると、サン・ロレンゾ島からラプンタ町の家々、それからカヤオの奥にはリマ市の建物などが朝霞の中から見えて美しい。パナマ以南では流石に第一の勝景である。

船は9時に岸壁に着き、すぐ多数の出迎えの人々がタラツブを上つて来て下さつた。中にサンマルコス大學理學部長ガルシヤ博士（ペル1日食準備委員長）其他3人（ロセンブラト、モスタホ、ロサダ）の教授たちも居られたので、今までの書面等の厚意に對する感謝を述べ、早速、當地に於ける準備委員會の活動状況や、諸外國から觀測隊の來否のニウス等を聞いた。今まで來意を通知して來てゐるのは我が日本と米國とだけである由。

まもなく自分は下船し、先づカヤオ市の日本人小學校生徒たちの出迎えを受け、それから送られてリマ市に着き、サン・マルチン廣場に面するホテル・ボリーヴの第203號室に入つた。

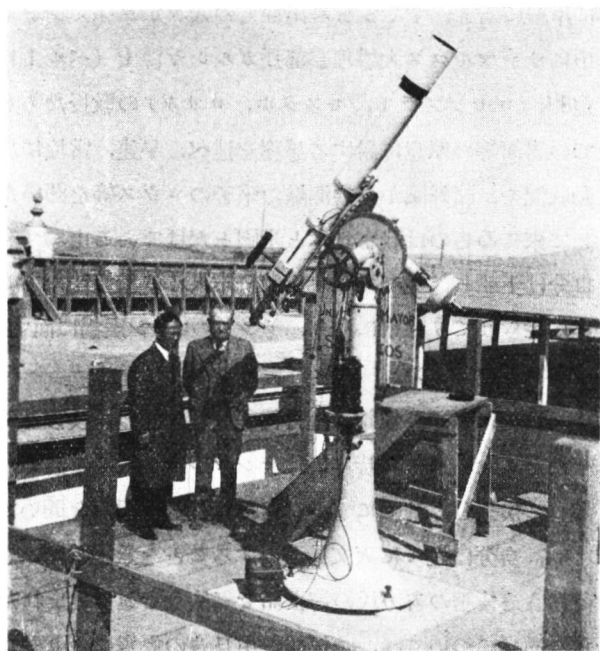
宿に少憩後、11時に帝國公使館に藤村代理公使を訪ね、挨拶と共に、今後の打ち合はせなどした。又、16時半にはサンマルコス大學を訪ね、ガルシヤ理學部長を訪ねて挨拶し、地圖により日食地の調査状況等を聞いた。又、大學の要求により、自分は近々に天文講演をすることを承諾した。

船からの荷物は公使館の吉方氏の御世話で無検査で運び込まれた。又、今後、内外公私の通譯については、公使館と中日會の厚意により特に橋本實君が毎日世話して下さることとなる。——案に相違して、當地のインテリケンシャ社會にも英語は殆んど通じないらしい！

5月11日(火曜日)

朝10時、ホテルにロセンブラト教授來訪。同教授は昨年ポーランドから當地に招かれ、サンマルコス大學で天文學と地球物理學とを講義してゐられる人であるが、専門は數理天文學で、盛んにアインシュタインの相對原理の興味を言はれる。英語が可なり通じる。

13時半、クラブ・ナショナルで藤村代理公使が主催となり、自分のために歓迎午餐會が開かれた。ペル1側の學者や官吏や記者其の他の有力者、それに中日會長始め4—5人の日本人も加はり、總計30人ばかり、誠に、なごやかに打ち解けた愉快的會合であつた。米國隊の先着コルフ氏も列席せられたので、同隊の様子も略ぼ知れた。——米國の専門天文家の1隊はロスアンゼルスで聞いた通り、ワシントンや、マコーミクや、キルソン山等の各天文臺からの混成隊で、遠く濠洲沖のエンダベリ島に向つたのであるが、此のペル1



(道儀と山本、ロセンブラット兩博士)
ペル1観測隊の主要機口徑13糎の赤道儀

にやつて来る米國隊といふのは、グレイス商船會社後援の下にニウヨーク市の理學博物館のヘイデン・プラネタリウムが主催するもので、C. フィシャ博士を隊長とし、4ヶ所に別れて、ペル1國の各所に觀測點を選ぶ筈だといふ。

17時、サンマルコス大學理學部に於ける日食委員會に招かれて出席した——其の開會前、ガルシャ博士等に案内されて、別室にある口徑13糎の赤道儀望遠鏡を見た。聞けば、之れは昨年ドイツ國ツアイス會社から購入したものであるが、主任教授が死去されたので、着荷のまゝになつてゐるものであ

る。細かく見た所、可なり優秀な器械で、眼視望遠鏡としての部分品も悉く備はり、立派なものである。適当な場所に据え付ければ、良い研究成績を擧げるだろうと思はれる。——日食委員会はガルシヤ博士を座長として開かれたが、少々意外にも、之れは全く日食及び観測地に關する自分の意見を聽かれる會合となつて了つた。それで、自分は(横山氏の通譯で)忌憚なき意見を述べ、今まで此の日食委員が主に氣象學者の意見を基とし、中心線に近き、成るべく高い山地を求めてゐられたに對し、自分は寧ろ太陽の高度角の重要性から立脚して、ペル1北部の、トルヒヨ市附近を再調査する必要を主張した。其の結果、教授モスタホ博士とエリクソン博士(リマ地理學協會員)と自分と、3人が近日中にトルヒヨ市に出張することゝ決定した。

いろいろ自分のため御世話下さつた細川通譯官は今夜カヤオ出帆の樂洋丸で、アルゼンチン國ブエノスアイレスに赴任せられる。

5月12日(水曜日)

朝6時起床、昨夕大學から借りて來た日食の明細地圖の一部を寫し取り、今後の調査研究の資料とする。

昨日、大學で見た口径13糎の屈折式赤道儀望遠鏡が、近く皆既日食を迎える當國の天文界多事の際、全く荷解きしないまゝにして、結局これを此の際誰も運用しないことになるのは、學界のために非常に惜いものである。そこで、自分は今日14時半に大學に赴き、ガルシヤ學長は講義中であつたので、書記官ソラ1リ博士に面會し、(早坂氏の通譯で)この際、かの13糎望遠鏡を中心として、ペル1國の日食觀測隊を組織されんことを熱心に薦め、其の實際方法其の他については、自分は出来るだけ御助けをするが、しかし組織や形式はどこまでも獨立の觀測隊として、ペル1國の名譽のため、又、此の國の天文學史の第1頁を飾るものとして、今回の日食を、只、日本や米國の遠征隊の觀測に委せたまゝにせず、ペル1國の學界も亦觀測の成果を直接に獲得せらるゝやうにと、説明した。ソラ1リ博士は自分の眞意を良く了解され、要約を書き留めて、後刻ガルシヤ博士等に相談するやう約束された。

16時、リマ市の日本人小學校講堂に於て、主として各地から集まつた學校教師諸氏に、今回の日食に關する講演をした。

18時、特に大統領ベナ井デス閣下に謁見を許されることになり、藤村代理公使同道、禮装して政廳に行つた。謁見は約10分間で、遠路來秘の勞をねぎらはれ、日食觀測の成功を祈ると共に、出来るだけ便宜を圖る旨、懇切なる言葉を頂き、3人記念寫眞の撮影する光榮を獲た後、“ユニヴァーサル”のマクリン氏の案内で、宮殿の美々しい各室や、國祖ピザロ將軍の居住のあと等を見、19時過に宿に歸つた。

5月13日(木曜日)

早朝5時に S 氏方に招かれて、母國日本からのラジオ放送を聴いた。

9時、大學からガルシヤ、モスタホ、ロセンブラト3教授がホテルに來訪せ



トルヒヨ市附近の觀測地撰定のため、リマ飛行場を出發する3委員
左よりデアンデラス中佐、山本博士、エリックソン博士、モスタホ教授(見送り)

られ、昨日自分がソラリ博士を通じて勧めたペル1國の日食觀測隊組織の件につき、大學は欣然として此の勧誘に従ひ、教授2名と學生3名とよりなる觀測隊を至急に組織すること、ついては、無經驗の者なので、今後も特に協力援助を希望せられ、自分も大に満足して、助力を諾した。

ついては、かの口径13糎赤道儀には、立派な自働装置があるので、之れに適當な天文カメラを付けたならば、コロナの寫眞撮影が出来ることを考へたので、早速、佐藤寫眞師に依頼し、市内で手頃の望遠レンズ1個を購求し、之れを天文カメラに組み立てることにした。之れには會々池山壽夫氏の厚意も加はり、すべてペル1隊のため、一致して一肌脱ぐ心となつた。

11時、立石氏の案内で地震學者ヨナ老博士が來訪された。ヨナ博士は1924

年スペイン國マドリドで國際測地學地球物理學同盟第2回總會が開かれた時に代表として出席した仲間であるが、3—4週間のマドリド滞在中、或る日、妻英子がヨナ博士の令嬢に日本服を着せて、共に寫眞を撮つたりしたことがある。其の寫眞を今こゝに博士は持つて來られたので、驚き、且つ喜んだ。

正午12時、藤村代理公使の案内で、勸業大臣に謁見、又、17時半には司法文教大臣に謁見した。何れも、日食觀測のため遠來の自分に對し、厚意と友情とに溢れ、勸業省は吾等の器械をリマからトルヒヨまで飛行機で運搬される意向である。

5月14日(金曜日)

朝10時、フオセト會社の飛行機でリマ出發、トルヒヨに向ふ。同行はエリクソン博士と、陸軍地理局長デアンデラス中佐(前記モスタホ博士は差支へ、其の代りである)それに中日會の清廣氏と、皆で4人である。飛行機は海岸に沿つて北行するのであるが、氣流がおだやかで、少しも揺れず、極めて心地が良い。機の高さは約500米ぐらゐか? 眼下の景色はペルー國の砂濱、砂原、砂山等を遺憾なく見せてくれる。實に全く沙漠で、其の間に點々と耕地や人家があるのみ。

12時、チンボテに一時着陸。此の時、當地の日本人會の人々10人ばかりに挨拶した。此の邊は日食中心線に近いので、重要な所である。

13時過ぎ、無事トルヒヨの飛行場に到着。多數の人々に迎えられ、帝國名譽領事館カロス・ラルコ氏邸に入る。午餐後、少時休息。

16時頃、特に當地方の地理事情に通する日秘人數名に來て頂いて、豫備的研究の意味で懇談した。やはり、高い山頂に登れば霧が避けられると主張する人があるが、どうも日食觀測術の大がかりなことを知らないらしい。無理もないことである。

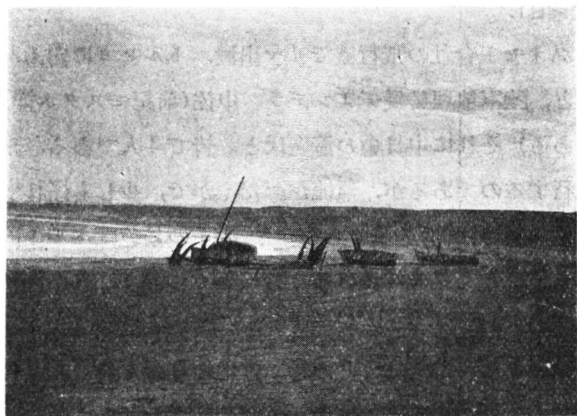
19時、ラルコ氏主催、吾々一行歓迎の意味で、知事、市長、大學總長、軍團長等官民有力者20人ばかりを招き、盛大な晚餐會が開かれ、夜半近くにまで及んだ。

5月15日(土曜日)

吾々一行4人と當地日本人會員數名とで、自動車2臺に分乘して、日食觀測

の候補地を見にまはる。まづ今朝はトルヒヨ市の北部セロ・カンパナナの北麓、ワンチャコの丘や濱邊、チャンチャン古蹟のあたりをドライブしたが、至る所砂地で、交通は不便では無さそうだが、バラツクなど建てる場合には多少の困難があると思はれる。中にセロ・カンパナナの北と、ワンチャコの濱とが最も良いと思はれた。

午後はラルコ氏も同行して頂いて、トルヒヨ市の東部即ちサンタ・カタリナ谷あたりをドライブしたが、川のためサント・ドミンゴ村への道が無くなつてゐる場所などにあひ、何の收穫もなくて引き上げた。



(ワンチャコ
の海岸)

5月16日(日曜日)

休日であるけれど、朝9時ラルコ氏邸を出發し、トルヒヨの南部各地視察に向ふ。日本人會員たちが増して、今日は自動車3臺である。

デリシヤス村からサラベリ濱に出で、昨日ヨナ博士の著書を贈られたホイレ氏の事務所を訪ひて謝意を表し、それからグワニヤペ岬へ行くため、長い海濱の水際を強行突破したのであるが、砂の中に車輪が埋まつて進退谷まつたこと兩3度。實に珍らしい經驗をした！

13時頃、井ル1の町に入つて、島氏の家で少憩、午餐を頂き、それから又、附近の地勢を見てまはつたが、やはり何所も砂々々で、大して良い觀測候補地は見つからず、遂に其のまゝ又砂の高原を突破して、日没頃サラベリに引き返し、19時頃トルヒヨ市の領事邸に歸着した。

皆可なり疲れたが、しかし時日の餘裕もないので、晚餐後、21時頃から當

地の日本人會員20名ばかりに來集して頂き、當地方の交通、通信、住居、氣象、氣候等々について、觀測上必要なことがらを聴取し、リマの委員會への報告の材料とした。

5月17日(月曜日)

今日はリマへ歸るのであるが、良候補地の一としてワンチャコ濱の井クトル・ラルコ館を今一度詳しく見ておく必要があると感じ、今朝10時から、カ1ロス・ラルコ氏同道で再び車を飛ばした。此のラルコ館は近年は主として夏期の遊覽客のためにのみ用ゐられる由で、今は全く開いてゐる。中には大小の室が20個もあり、廣さも充分で、萬事非常に好條件のものと思はれる。——天氣も、このトルヒヨ市附近は、リマ附近と違ひ、朝夕の霧の心配もなく、殊に午後と夜とは、5—6月の候にも晴天が多いことが明らかになつた。

正午トルヒヨに歸り、午餐後、13時半發のフォセト機で4人打ち揃ひ、直行してリマに歸る。途中、カスマあたりから雲があつたので、飛行機は2000米ぐらゐの高さを飛び続け、16時にリマに着陸、直ちにホテル・ボリーダに歸つた。(つゞく)

地 方 係 の 設 置

本部と支部、地方委員、會員との緊密な連絡及び本部より支部、地方委員への指導、授助を計るために地方係を置きます。地方係は役員會に直屬し、委員は理事大口周作、宇野良雄の2氏、事務は京都市上京區紫竹西南町55、宇野良雄方にて執ります。本會の方針、各地方の情報を「天界」に發表し、漸次活動を始める豫定です。地方委員、會員諸氏の御協力を望みます。

各地の天文情報、支部通信、會息消息、本部に對する希望等を毎月末までに宇野良雄宛お送り下さい。(1937年9月)

エンケ彗星發見さる

去る9月3日、米國リク天文臺のジェファス博士はクロスリ反射鏡によつて、待望のエンケ彗星を發見した。位置はマトキ1キツ氏の豫報に極めて近く、光度は18級である。之れは今年度の第8星で、1937hと假稱せられる。近日點通過は1937年末である。